

博物館だより



No.116

平成28年7月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

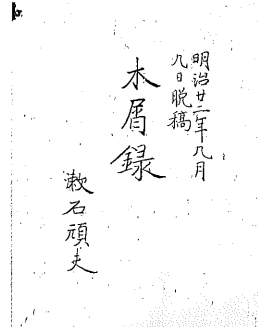
博物館新展示・ここに注目!
小宮豊隆資料

「漱石コレクショーン」

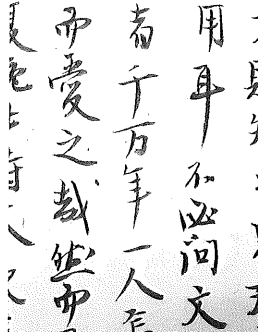
夏目漱石没後百年の今年、文豪ゆかりの事物は注目の的で、博物館所蔵の「小宮豊隆資料」もその一つです。漱石の愛弟子だった町出身の文芸評論家が愛蔵した、漱石ゆかりの逸品をご紹介しますしよ。

●漱石作漢詩紀行文「木屑録」

漱石が無二の親友とした人物に正岡子規がいます。子規は近代俳句中興の祖と呼ばれ、それまで「隠居の手慰み」と言われ



▲表紙。左下に「漱石」の銘



▲巻末に記される子規の評

ていた俳句を至高の文芸にまで高めたことで知られますが、二人は一高（第一高等学校。のちの東京大学）の同級生でした。

落語をきっかけに交友が始まり、互いの文才を認め合うようになり、その始まりが双方の著作の交換で、子規が「七草集」を著したのに対し、漱石は「木屑録」を以て応え、これを読んだ子規は漱石の才能を「千万年に一人」と讃えました。

「俳聖」と「文豪」という二人の天才が互いを認め合った最初の著作であり、日本文学史上の記念碑的作品です。

平成28年度 博物館企画展① 第10回 向井澄男写真展 不動X—水辺の風景—

当館では7月20日(水)から8月21日(日)まで、故向井澄男さんの写真展を開催します。

向井さんは永年にわたって京築の祭や風物を探り続けた写真家で、平成15年に74歳で亡くなられましたが、数十万点にもおよぶ遺作は平成18年にご遺族から当館に寄付されました。以後、当館では毎年「不動」の共通タイトルで、向井さんが捉えた、ふる

さとの豊かな自然と文化をビジュアルに追う写真展を開催しています。10回目を迎える今回のテーマは「水辺の風景」。ふるさとの水辺に展開する懐かしの風景、多様な暮らしの姿をご覧ください。

●観覧料 常設展の観覧料
●場 所 当館展示室
●観覧料 常設展の観覧料
(大人二〇〇円・高校生以下は一〇〇円)でご覧いただけます。



▲寒中の岩岳川で行われた集団みそぎ。求菩提山への峰入修行を前にした浄めの作法(1985年/豊前市)

7月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
7月2日(土) 9時30分
 - 【古文書講座】
7月9日(土) 13時30分
 - 【古典かな講座】
7月16日(土) 9時30分
 - 【みやこ学講座】
7月23日(土) 10時00分
- ※日程変更となる場合があります。

博物館友の会で「楽習」を!

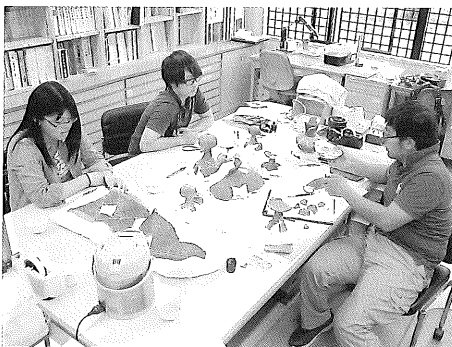
博物館友の会は「故郷を楽しむ学ぶ」をモットーに見学会や各種イベントを行っています。関心のある方ならどなたでも参加OK。お気軽にお申込みを!

- ♪入会の方法
博物館窓口で登録・会費納入
- ♪年間会費
個人会員 3000円
家族会員 1名 2000円
- ♪お問い合わせ先
博物館 ☎33-4666

5・6月の業務日誌から

6月3日(金)ハワイ島ヒロのセント・ジョセフスクールの皆さんが博物館を訪れました。展示を見て、実物に触れ、母国語対応の音声ガイドを聴くなどして、五感でみやこ町の歴史を感じていただきました。

5月26日(木)別府大学考古学研究室の皆さんが、町内古墳の出土資料調査に訪れました。細かな観察の結果、新たな発見もあり、みやこ町の古墳文化の奥深さを感じたとのことで、今後は古墳調査も実施予定とのことです。



▲橋塚古墳の出土土器を実測調査しました



▲みやこ町の歴史を楽しく学んで頂きました

みやこの歴史発見伝 89

「一寸坊と伝説の寺院」

— 中世の山岳寺院と石塔 —

京都郡と田川郡を結ぶ交通の要衝となつている「新仲哀トネル」の京都郡側には、みやこ町勝山松田の「菩提」とよばれる集落があります。この集落付近に「一寸坊の墓」とよばれる石塔があります。「一寸坊」といえば、「お椀の船に針の刀」の「一寸法師」の物語を思い浮かべますが、この「一寸坊」は少し趣が異なるストーリーが集落に伝わっています。

伝説

一寸坊は、小松ヶ池に住む大蛇と村娘との間に生まれた、大変、賢い子どもであったといわれます。景行天皇がこの地を訪れたときに、階段を踏み外して落ちそうになったところを、身を投げ出して救ったことで、褒美を頂きました。この褒美で四九の寺院を建てたことから、この地が「菩提」とよばれるようになったと



▲「一寸坊の墓」

伝えられます。

「一寸坊の墓」は、この功績を称えた供養塔と伝えられています。

「一寸坊の墓」

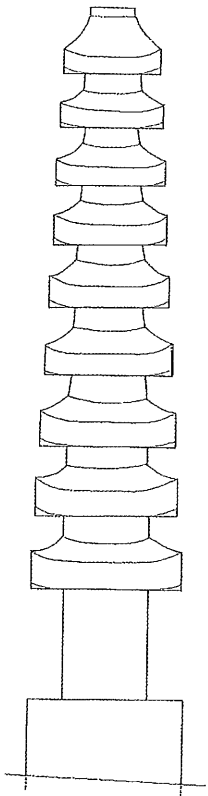
この石塔は、「石造重層塔」とよばれ「豊前国分寺三重塔」のような木造の塔を石造化したものです。石造物の中でも古くから造られているもので、木造の塔と同じように三重から十三重までの奇数の屋根の重なりによって造られるものです。現在みられる「一寸坊の墓」が、本来、何重塔であったか不明でしたが、近年、石塔の西側にある宝積寺の境内に屋根の笠石四点が残されていることが確認できました。これらの部材と石塔の実測を行い、屋根の形などをもとに図面上で復元してみましたところ、本来、「九重塔」として造られたことが分かりました。また県内外にみられる形の似た石造層塔を調査したところ、「一寸坊の墓」は、鎌

倉時代後期から南北朝時代はじめ頃にかけて造られたものとみられています。

この石塔の近くには、片岩と呼ばれる緑色の自然石が二基立っています。これは「自然石板碑」とよばれる供養塔や墓碑の一つとみられ、よく見ると二条の線を刻んだあとがみられます。いずれも高さ2mを超すもので、京築・田川地域では最大の規模を誇ります。

伝説の舞台「菩提」

この物語の舞台となった菩提の集落やその周辺には、物語に関係する史跡がみられます。特に「菩提四九院」については、天台宗の創始者である最澄が、菩提と香春岳に四九院を開いたという伝説が残っています。これを裏付けるように、この地には天台系の寺院や僧坊が大規模に展開していたと伝えられています。また記録によると、戦国時代の兵乱により、そのほとんどが廃絶し、江戸時代には霜田寺、三会寺、宝積寺の三か寺のみが残ったといわれています。この三つのお寺のうち霜田寺の跡では、経筒二本と壺が出土しています。これは平安時代に、お経を後世に伝えることが大きな功德になると考えられ、経典を銅製の筒に入れて埋め



▲「一寸坊の墓」推定復元図
*井上信隆・江藤和幸
「福岡県みやこ町勝山松田所在の花崗岩製石造層塔調査報告」
『石造文化研究第28号』
2010より転載

造られた仏像であることが確認され、現在、町の文化財指定を受けており、菩提四九院の信仰の形を今に伝える



▲下田経塚出土品

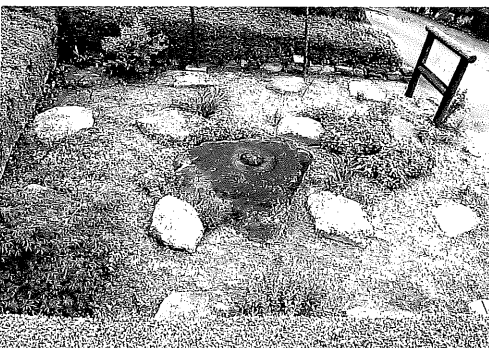
たもので、壺は経筒を守るために上に被せられていました。経筒の表面には大治二（一二七）年九月に経筒が埋められたという内容が刻まれており現在、町の文化財指定を受けています。また、吉富町の八幡古表神社にはこの寺と関わりがうかがえる鉄製の鰐口が残されています。鰐口は、社寺で礼拝する場所に吊るされる鳴器で、この表面には慶長七（一六〇二）年の年号と併せ、霜田寺の観音堂に奉納されたという内容の銘文をみることで、県の文化財指定を受けています。

宝積寺は、菩提四九院のうち、現在まで続く唯一の寺院で、木造の菩薩像が祀られています。この仏像は、その形から、平安時代の終わり頃に

唯一の仏像として注目されます。

この菩提四九院の中でも信仰の中心的な寺院であったと伝えられるのが菩提廃寺跡です。この寺院は、八世紀の後半頃に建てられたと考えられており、現在、塔と金堂跡とみられる建物の礎石をみることでできます。特に塔跡の礎石は当時の状態が良く保たれており、塔の心柱を支える礎石は、中央が出ベソのように盛り上がる、「出柄式」とよばれるもので、九州では唯一の例として県の文化財指定を受けています。礎石から復元される心柱の直径や配置などから計算すると、高さ二四mほどの規模とみられ、現在の「豊前国分寺三重塔」とほぼ同じ高さの塔であったと推測されています。

「一寸坊」の物語と、かつてこの一帯に数多く展開していた寺院が結び付いた物語を、今後もこの集落の名前とともに後世に伝えてゆきたいものです。
(井上信隆)



▲菩提廃寺 塔跡礎石